

教壇を離れて17年になる。中学生に数学を指導したのが20年間だから、ほぼ同じ歳月が経過したことになる。最初の9年間は、岡山市教委で教職員の人事やサービスを担当する仕事を中心であった。そこでは電卓があれば仕事ができ、数学との関りは感じなかった。小・中学校で学習した分数計算、正負の数の計算、分数式、方程式、因数分解等々全くといっていいほど無関係であった。次の8年間は、中学校長として学校経営に携わったが、ここでも同様であった。だから、数学教師としての20年が無かったら「中学で学ぶ数学などは社会生活とは無関係だ。」「こんなに難しいことを学ぶ必要がない。」「数学があるから勉強がいやだ。学校などに行きたくない。」という子供の声に対して「そのとおりだ。」と賛成したと思う。

しかし、小学校の「算数」以来、私の身にしみついた「数学」は色々な場面で私を助けてくれた。

○ものごとを理詰めで考えたり（論理的に思考する）、見通しをもって考えることができる。

○数学の証明で鍛えられているので、ものごとを簡明に表現できる。

○数学では、公理、定理を頭に入れて問題解決に当たる。校長の学校経営も同様で、自分の教育理念をもち、自分なりの基本的な考え方をもっていれば、多発する諸問題に対応できる。

などの点であろうか。

このように、私自身にとっては「数学」は、大いに役立つ存在であった。

ところで、最近の某新聞の社説で、大変気になる一文を見た。

「中学1・2年を対象にした国際比較調査では、日本の中学生たちは数学や理科を学ぶ楽しさについての意識が、参加41か国中、最低ランクという結果がある。文部省が昨年公表した小・中学生の学力水準調査でも計算や暗記は優れているが、応用力や表現力が乏しかった。自ら考える力が不足しているのである。」

である。「受験数学」の影響と思われるが、この事実を真摯に受け止める必要がある。前述したように、数学は日常生活には現れてこないが自然科学の諸領域との関連は深い。特に、科学技術の発展には欠くことができない。天然資源に恵まれない我が国は、科学技術立国を目指すしかない。そのためには、算数・数学教育は欠かせない。だから、数学嫌い、応用力・思考力・表現力不足では大変困るのである。

そこで、計算力や暗記中心の「受験数学」の指導を改めることが急務のように思われる。数学教師の努力の方向を改めることが急務であると思う。入試制度の改革、入試問題の改善を求めることも必要であるが、先ず、自分の授業を見つめ「目の前にいる子供達の将来にとって、そして、我が国の将来にとって、何をどう指導すればよいのか。」をもう一度考えてみる必要があるのではないだろうか。学校週5日制を念頭に入れた新教育課程の基準も明らかになる。選択時間の拡大を始めとして、各学校の裁量が拡大する。習熟度別学習や生徒選択の数学時間などでの数学教師の創意工夫が期待されている。